

里地里山の保全・活用の取組における課題と技術的方策等

分類	(地域レベルでの取組基盤の整備)協働と持続性確保のための枠組み・体制の整備
手法名	地域と連携した干潟環境の再生 (地域住民が利用・保全する場としての再生)
主体	NPO法人くすの木自然館
背景 (地域の課題)	重富干潟は鹿児島湾唯一の干潟だが、ゴミが散乱し人も近づかないところになっていた。干潟は本来、水質浄化機能をもつとともに、海洋生物の産卵・稚魚時代の生息場所として重要であり、鳥類を含むと独特な生態系を育む場所である。錦江湾に唯一の干潟である重富干潟を再生・保全する必要があった。
手法/方策の詳細	<p>NPO法人くすの木自然館では、地域の自然環境に依拠するNPOとして、干潟の環境復元と地域の人にとって親しめる場に再生するため、以下のような手法で取り組んだ。</p> <p>①海岸のごみをゼロに 毎日ゴミを拾って内容を分析し、ゴミの種類で対策を検討した。例えば、弁当容器などが多いことから、弁当ゴミを捨てる人がいる昼食後の時間にゴミ拾いを実行しその姿を見せることで、その干潟を管理していることをアピールし、強制ではなく本人に規範意識をもってもらうことで、ゴミ捨てるの抑制に成功した。</p> <p>②行政との連動 ゴミ拾いで集積したデータを役場に示し、行政管理で可能な対応を働きかけた。例えば、花火や夜の飲食のゴミがある場合は、駐車場の夜間の鍵かけを提案した。実際にゴミがへったので、その結果も行政に報告し、対策の有効性を認識してもらうとともに、行政からの信頼を得た。</p> <p>③地域の参加 ゴミ拾いや海岸清掃参加に特典をつけて地域の子どもたちの参加を呼びかけ、参加した子どもたちは登録をして行事や生き物観察会などの際に呼びかけを行った。</p> <p>④子どもたちの保護者、利用者、近所からのボランティア参加、および、干潟の利用 子どもが干潟にできれば大人も足を運ぶようになり、カフェを開いた。治安もよくなり、散歩や休憩で訪れる人も増えた。カフェに隣接して干潟の生態系について知ってもらったための展示をするなどして、地域の人々への普及啓発を図った。このような地道な取組により、地域住民に親しまれる干潟の再生、地域住民とともに保全・活用していく持続的な体制づくりができた。</p> <p>⑤地域(自治会)の取り組みへ 地域の人々が多く足を運ぶようになると、自治会も動きだし、NPOと自治会とが連携して防風林づくりの活動を行った。</p> <p>③～⑤の過程では、行政とくすの木自然館が連携してイベントの企画・コーディネートを行った。</p>
手法・技術的視点	最初は少人数の参加でもいいから出来ることから活動をはじめ、それを多くの人に実際に見せる工夫をすることにより、環境保全の意識を高め、参加者を増やしていくことが重要。
	<p style="text-align: center;">連携のコーディネート</p> <p style="text-align: center;">〇人材の確保 〇環境教育の普及 〇用具の整備 〇飲料の提供 〇...他</p>
参考資料	里なび研修会in鹿児島 浜本麦 NPO法人くすの木自然館専門研究員